

雪に願うこと

2006(平成18)年6月4日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督＝根岸吉太郎／原作＝鳴海章／出演＝伊勢谷友介／佐藤浩市／小泉今日子／吹石一恵／山崎努／草笛光子／香川照之／小澤征悦／椎名桔平／山本浩司／津川雅彦／岡本竜汰／でんでん／出口哲也 (ビターズ・エンド配給／2005年日本映画／112分)

……北海道・帯広の「ばんえい競馬」を軸に展開される兄弟の物語は、東京国際映画祭史上初の四冠を獲得！ 東京での夢が破れて帰郷した弟に比べ、地元で根を張った兄、「大将」の生き方と存在感は圧倒的！ こんな映画を観れば、都市と地方、金持ちと貧乏人という「格差」を嘆く前に、人間としてやるべきことが見えてくるのでは……？ さらに、サラブレッド競走馬の華麗さはなくとも、1トンのそりを曳く巨漢馬たちのレースが、人間たちに教えてくれる教訓も多いはず……？



ブリーダーズ・カップ・クラシック VS ばんえい競馬、ソーニャドール VS ウンリユウ

『夢駆ける馬ドリーマー』(05年)は、骨折したサラブレッドの競走馬と、祖父・父・娘と三代続く調教師一家との愛情を描く感動作。その映画のラストは、大観衆が注視する中で実施される「ブリーダーズ・カップ・クラシック」という大賞金レース。ところが、サラブレッドによるレースは、2km弱を走るとしても時間的にみればホンの一瞬。そこで、映画ではスローモーションを使ったり、途中でフラッシュバックさせることによって、最後の勝利を盛り上げていくことが不可欠。観客はそのテクニックによって(?)、お目当ての馬の勝利がわかっているもつい一緒に興奮させられてしまうもの……。これは『シービスケット』(03年)でも同じ。

これに対して、世界に1つしかない「ばんえい競馬」は、1トンのそりを曳きながら、2カ所の障害(坂)のある200mの直線距離の競争。面白いのは、ばん

えい競馬は鼻先でゴールが決まるのではなく、ソリの最後端で決まること。これは「荷物を運びきること」を目的にした競技であるため。したがって、馬は途中で一息ついたりしながら進むのが常態で、スピードだけではなく持久力と一瞬のパワーが要求されるうえ、騎手のテクニックも複雑に……。

また、観客も馬と一緒に走りながら(?)、一体となって興奮することができる。観客層も、サラブレッド競馬はもともと王室や貴族を対象としたものだが、ばんえい競馬の方は、庶民を対象としたもの……。さらに、ばんえい競馬は元は農耕馬だった馬だったそうだが、現在は混血種が主流。そして、その身体はサラブレッドの約2倍の大きさがあり、1トンを越す巨漢馬が多いとのこと。

そんなブリーダーズ・カップ・クラシックレースとばんえい競馬との比較やソニーヤードルとウンリュウの比較も、この映画の楽しみの1つ……。

何と軟弱な東京帰りの弟……

東京で社長サンをしていた矢崎学(伊勢谷友介)は、今は1人、帯広のばんえい競馬場にある矢崎厩舎へ向かうタクシーの中。彼は東京でネット販売の事業を立ち上げ、一時は都心で派手な生活をしていたが、事業に失敗。気がついたら、ふと故郷の兄貴や母親に会いたいと思ったとのことだが、そりゃいくら何でも甘チョロすぎるのでは……?

故郷へ逃げ戻っているに違いないと判断した須藤(小澤征悦)は、自己破産申立書へ代表者である学に押印させるべく、矢崎厩舎を訪れてくるが、須藤に対する学の対応を見ていると、ホントに腹が立ってくる。連帯保証人となっている妻の両親や親友に迷惑がかかることにあえて目をつぶって放置し、自分だけは逃げ出してしまい、須藤からの追及に「生命保険に入っているから……」と答えるのを聞いていると、弁護士業務の中でこのような姿をよく見ているだけに、いい加減うんざり……。須藤が「それなら、ここで死んでみろよ!」と叫ぶ気持がよくわかる……。格差の拡大が批判される中、「敗者にも復活のチャンス!」と言わなければならないことはわかるが、私はこの学の生き方や態度にはきわめて否定的……。

どっしりと地元を根を張った大将！

弟の学に対し、大将と呼ばれている兄の矢崎威夫（佐藤浩市）は、元騎手だったが今は調教師として矢崎厩舎を営んでいる立場。弟とは一回り年が違うらしいが、そのどっしりと地元を根を張った生き方は、頑固で無骨者だが、非常に魅力的。矢崎厩舎には、厩務員として働くベテランのモッさん（でんでん）や、学と小学校の同級生である加藤テツヲ（山本浩司）などがいたし、ばんえい競馬の期間中だけ賄い婦として住み込んでいる「母さん」と呼ばれている田中晴子（小泉今日子）や、女性騎手の首藤牧恵（吹石一恵）もいた。突然、東京からやってきた「社長サン」に対する彼ら、彼女らの対応はさまざま……。東京帰りの社長サンと「大将」配下のこれらの人々との交流や反発の様子は、映画を観ながらじっくりと味わってもらいたいものだ。

牧恵の軽さ VS 晴子の存在感……

人はみんなそれぞれ悩みを持っているもの。しかし、その悩みを表面に出すか出さないかは、人によって異なる。私は別に、悩みをじっと胸の奥にしまい込んで表に見せない方がベターだとか、それが男のあるべき姿だなどと思っているわけではない。しかし、簡単に自分の悩みを表に出すことによって、他人から同情を買おうというような姿勢は大キライ……。この映画を観ていると、学にそんな姿勢が見受けられるわけではないが、やはり甘えが透けて見えて仕方がない。そのクセ、気持の整理ができて東京へ帰る決心がつくと、晴子に対して、兄貴との結婚をお願いする(?) など、ちょっとボケたお節介を……。

学と同じように「甘え」が見え隠れするのが、女性騎手の牧恵。伝説の騎手の首藤を父に持つ娘だが、父親が多額の借金をして失踪したことによる心の傷が、未だ整理できていないよう。したがって、騎手として成績が上がらなくなった今、心に悩みを持ち、ウンリュウの騎手として決戦に臨む姿勢にもどこか甘えが……。

この学や牧恵たち若者に比べれば、賄い婦として矢崎厩舎の威夫の側でイキイキと働いている晴子は、断然大人。もっとも、賄い婦の仕事だけでは子持ちの生活を支えていくことができないため、町でスナックをやっていることがわかるう

え、丹波（山崎努）という金貸しのパトロンまでいるというから驚き……。子供を抱えた女が1人、キレイ事だけで生きてきたのではないということを思い知らされるとともに、それを率直に認めたくえて今をしっかりと生きている晴子の存在感は、威夫と同じように圧倒的……。

スクリーンから伝わってくる手づくりの香り……

この映画は、そのほとんどが帯広のばんえい競馬場にある矢崎厩舎が舞台。厩舎の仕事は、朝早くから。都会育ちの私たちには、馬の世話やその調教がどれほど大変なものかわかるはずもないが、この映画を観ていると、それがリアルに伝わってくる。そして、馬だって人間と同じように風邪をひいたり、ケガをしたりするから、必要不可欠なのが獣医。黒川獣医（椎名桔平）の手当ての甲斐なく、腸捻転で死んでいく馬の姿やそのお葬式の様子を見ていると、矢崎厩舎にとって、馬は家族同様、いやそれ以上の存在なんだということがよくわかる。そして、雪の寒い朝、白い息をいっぱい吐きながらウンリュウたちの調教をする学やテツヲそして牧恵たちの姿を見ていると、それだけで興奮してくるから不思議……。ワケのわからないCGやVFXを駆使しなくても、北海道の自然の姿や、人と馬が一体となって展開しているごく日常的な日々の暮らしを観客に示すことによって、共感や感動を与えることができることがよくわかる。東京国際映画祭でこの映画が史上初の四冠を受賞したのは、誰にでもわかりやすく感動を与えてくれるそんな手づくりの香りが大きかったのでは……？

ウンリュウの勝負と学の決断は……？

今日はいよいよ、年に1度開催される最大のレース「ばんえい記念」の日。前回無念の敗北をしたウンリュウは、今日敗れば馬肉にされる運命だから、まさに生死を賭けた大勝負……。また、騎手の牧恵も立ち直ることができるかどうかの大きな分かれ目……。そんな勝負のレースに、大将が授けた作戦とは……？そして、その作戦はうまく功を奏するのだろうか……？

他方、意外だったのは、大方の予想に反して（？）矢崎厩舎の人々に溶け込み、ウンリュウと大の仲良しになった学が、大将からの「このままここで一緒に生活

するか？」との勧誘にもかかわらず、再度東京でやり直してみると決意したこと。彼が言うのは、何よりもまず須藤に謝りたいということ。これはある意味で当然のことだが、矢崎厩舎での馬の世話に明け暮れる生活と、テツヲをはじめとする仲間たちとの心の交流の中、やっと学もそういう心境に達することができたということだ。

2番目の障害（坂）を前に、ウンリュウに「待て」をかけて手綱を引き絞る牧恵。果たしてウンリュウは、ここから一気に坂を駆け上がり、ゴールまで1着でたどり着くことができるのだろうか……？ また、今や一回りも二回りも大きく成長した学は東京に戻り、新たな人生をしっかりと歩みはじめることができるのだろうか……？ 大きなお世話ながら、もしそうなれば、牧恵もいつか学の元に……？

2006(平成18)年6月6日記

ミニコラム

SHOW - HEY 札幌競馬場に初見参！

囲碁・将棋そして麻雀と知能ゲームや賭け事大好き人間の私だが、競輪・競馬という他人(?)任せの賭け事は敬遠気味。そんな私が06年9月3日札幌競馬場に初見参！これは私が監事を務める団体の総会の後の行事だが、前日のすすきの界限での「奮闘」に続き、今日は競馬場のVIP席で大奮闘。

レース観戦には競馬新聞が不可欠だが、私はその読み方を知らないうえ、馬券の買い方にも単勝・連勝複式以外に馬番や馬枠など複雑なルールがあることを知って大慌て。まちがって買った馬券が当たるといふ面白い小説が阿川弘之の『ほんこつ』だったが、どうせ顔も知らない馬畜生がやるのだから

誕生日や語呂合わせで買った馬券は大ハズレ。そこでこれではダメと昼飯もそこそこに新聞での研究に没頭し、まずは本命中心に戦略を定めるとたちまち当たり券が続出！こうなりゃ、ハマってくるのがバクチ。次第に投入額はデカくなり、退出時には私の財布は結構膨らむことに……。まさにピギナーズラックだが、勝負師 SHOW - HEYの意外な一面も。この日驚いたのは、普段仕事上で見るのとは全く異なる質な団体役員たちの真剣な顔。日常業務もこれくらい真剣にやれば業績は格段にアップすると思うのだが……。

2006(平成18)年11月20日記